

## 藤枝晃著『文字の文化史』（講談社學術文庫、一九九九年）

本書は一九六七年―六八年に『日本美術工藝』誌に『文字の生い立ち』の題で連載されていたものを、一九七一年に岩波書店より單行本として刊行されたもので、一九九一年に岩波書店同時代ライブラリーとして再刊された。講談社學術文庫版は同時代ライブラリー版を底本としている。また『漢字的文化史』の題で中文版も刊行されている。著者の藤枝晃（一九一―一九九八年）は京都大學人文科學研究所に所屬し、居延漢簡や敦煌文書などの研究に従事してきた。

本書の本編は、「殷人の繪文字」「神々との對話」「饗餞の背面」「皇帝の文字」「政治の文字」「印章」「絹」「紙の出現」「卷物の尊嚴」「古文書」「新しい書物のかたち」「漢字の周邊」「印刷の始まり」「不滅への願い」「木版印刷」「活版印刷」の全一六章からなる。

著者の「あとがき」によれば、本書は「書道史でない書の歴史、文字のかたちだけに片寄らない文字の歴史と言ったようなものを見出せないだろうか」という發想から生まれたものであり、殷代の甲骨から始まって青銅器・木簡・帛書・紙・石碑といった書寫材料や、卷子本・冊子本といった書物の形態の變遷に注目する。また殷代には王が神を祀るために使用される「神の文字」であった漢字が、秦以後、臣下が皇帝のための仕事を行うのに使用される「政治の文字」となり、そして五代・宋以後の印刷技術の發明と書物の普及により「萬人のもの」となっていく過程を描いている。このように本書は漢字がどのように書かれてきたか、扱われてきたかという漢字をめぐる文化の變遷

をテーマとしており、『文字の文化史』の題にふさわしい内容となっている。

本書では甲骨文・金文の圖版に通常よく使われる拓本だけではなく、可能な限り實物の甲骨や青銅器の寫眞も使用するという試みを意識的に行っている。甲骨や青銅器の實物の寫眞の效用は近年になって注目されるようになってきた事項で、本書の初版當時にはかなり斬新な試みであったはずである。また甲骨文・金文について、これらが漢代の木簡や明清時代の檔案資料のような古文書ではないとは言いつてもない性質を持っていると指摘しているが、甲骨文・金文の文書としての側面もやはり近年になって注目されるようになってきた事項である。本書はこのように現在の研究水準でも通用する視点を具えている。

（佐藤信彌）